

Large Grammar 法を応用したアウトプット活動 ～繋がる英語力の育成をめざして～

石田 順^{1*}・金森玲子¹・竹川由紀子¹・足立和美²

¹ 鳥取大学附属中学校 英語科

² 鳥取大学地域学部

*E-mail: ishida_j@tottori-u.ac.jp

takekawa_yk@tottori-u.ac.jp

onishirk@tottori-u.ac.jp

ISHIDA Jun¹, KANAMORI Reiko¹, TAKEKAWA Yukiko¹, and ADACHI Kazumi² (¹Tottori University Junior High School, ²Faculty of Regional Sciences, Tottori University) : **Junior high school output activities based on the “Large Grammar” method — Using English as a communication tool.**

要旨 — 英語科では、学習した英語を用いて実際にコミュニケーションが行えることを目標として日常的にアウトプット活動を実践している。具体的な活動の一つとしては、共同研究者である鳥取大学地域学部の足立和美が提唱する Large Grammar の手法による活動を用いて即興でのアウトプットの場面を各学年の授業に取り入れている。本研究では、その理論と各学年での活動事例を紹介する。生徒一人ひとりが課題に向かって「主体的に」「対話的に」「深く」考え、英語で他者と繋がっていくためには、どのような活動が考えられるだろうか。「個」の学びを深めるために、各学年で行ってきたやりくりを紹介する。

キーワード — Large Grammar, チャンク, アウトプット活動

Abstract — At Tottori University junior high school we practice output activities on a daily basis in our English classes with the aim of enhancing students’ ability to communicate in English. These activities, using the Large Grammar method proposed by one of the authors, Kazumi Adachi, rely on improvised output. In this paper, we introduce the theory of Large Grammar, then give examples of activities used in each grade. We are aiming for activities that encourage students to think “voluntarily”, “interactively” and “deeply” about the task. We also want them to connect with others in English. We will introduce the attempts that we have made in each grade to deepen students individual learning.

Key words — Large Grammar, chunks, output activities

1. はじめに

今、英語教育を巡る状況が大きく変わりつつある。新学習指導要領(平成 29 年 3 月告示)において、小学校中学年に外国語活動、高学年に外国語が導入された。平成 30 年、31 年の学習指導要領移行期を経て、平成 32 年度から全面実施である。現行の学習指導要領では 5, 6 年生対象だった「外国語(英語)活動」を 3, 4 年生対象に引き下げ、5, 6 年生では英語を「教科」とするよう定めた。これまで、親しみを持たせる目的だから中学英語の前倒しはしない、文字は教えないという方針だった。それが、これからは正式な教科なので、検定教科書があり、もちろん文

字を教え、簡単な文法も教え、成績評価もある。小学校 4 年間の英語授業で、600 ～ 700 語程度の単語を覚えることになっている。また中学校への接続を図ることを重視することが求められた。

小学校での外国語導入を受け、中学校の英語教育も当然変えなければならぬだろう。これまでのような初期の文字指導(アルファベット)やフォニックスのような音声指導から始めるのではなく、英語でのコミュニケーションを重視した指導や言語活動を入学当初から積極的に進めていかなければならない。新学習指導要領でも外国語科の目標は「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」

を育成することとしている。これまで以上に英語「を」どう学ぶかではなく、英語「で」何をやりとりするのか、に重きを置いた指導に心がけなければならない。

しかし、中学生になると小学校時ほど積極的な発話をしようとしなくなる。それは、学習の難易度が上がるだけでなく、自意識が育ち、正確さへのこだわりや不安が増大する認知的発達段階へ入るといった学習者自身の変容にもある。そういったことも踏まえつつ、中学生のコミュニケーション能力を高める効果的なアプローチを模索する必要がある。

正確さへのこだわりや不安が顕著に見られるのは、ライティング活動である。生徒にとっては文字として残る自身の英語表現に対して、スピーキング以上に正確さを追求するあまり、相手を意識したコミュニケーションツールという認識が希薄になりがちでもある。

生徒自身が英語でのアウトプット活動に積極的に関わろうとする場の設定とコミュニケーションツールとしての英語表現のブラッシュアップの両立を目指した試行錯誤が続いている。

2. 生徒の実態

本校の生徒の英語学習における実態として、

- ・コミュニケーション活動に積極的である。
- ・異文化や外国への興味・関心が強い。
- ・語彙や表現をインプットすることが得意な生徒も苦手な生徒も見られる。
- ・インプットしている語彙を即興でアウトプットすることが苦手である。

などの様子が挙げられる。学習に前向きに取り組む一方、既習の英語を用いたやり取りに苦勞している生徒が多く、英語でのやり取りが生徒にとって簡単なことではないことがうかがえる。このような

生徒の実態を踏まえたうえで、どのような活動が生徒の学びを深めていくことに効果的であるか、また、英語を手段として相手と繋がっていくためには、どのような活動が考えられるかを考え、日々の授業研究に取り組むこととした。

3. Large Grammar 活動

生徒が英語でコミュニケーションを図るためには、語いや表現の習得などのインプットの蓄積が必要である。その蓄積があつて、適切なアウトプット、すなわち「言いたいことが言える」「書きたいことが書ける」というアウトプットへ繋がっていく。コミュニケーションの場面では、即興性が求められるため、瞬時にアウトプットできるためのトレーニング活動が不可欠である。トレーニングの一例として、鳥取大学地域学部の足立和美特命教授が提唱されている Large Grammar 活動を行っている。

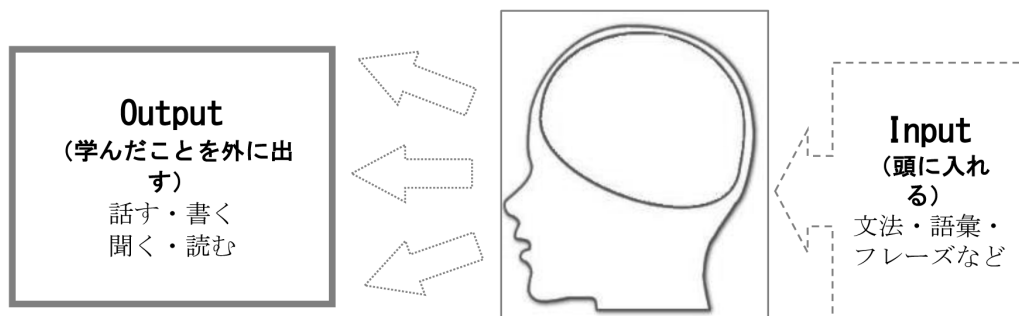
3.1 目的

英語を使うためのきっかけとなるチャンク(教科書で既習のものを区切ったもの)を与えてインプット活動を行い、習得した英語をリサイクルするかのよう、書いたり話したりできるようなアウトプット活動へ繋げていく。

3.2 インプット活動(例)

- ①ワークシートを配布する。(図 1)
- ②ペアワークで一方が日本語、もう一方がそれをすぐに英文に直し、それが正しいかどうか日本語を言ったほうがチェックする。
- ③インプットするチャンクの数は一回につき 10 文から 15 文程度で行い、制限時間に何度かチェックを行う。

Large Grammar のイメージ



Lesson 4 The Story of Sadako

チャンク集 日本語を見て、英語に直すことができるようにしましょう。

1. ... Have you ever ...?	1. ～今までに...したことがありますか～?
2. ... Why don't you ...?	2. ～しませんか?～?
3. ... we should ...?	3. ～私たちは...すべきである～?
4. ... the importance of (peace) ...?	4. ～(平和)の大切さ～?
5. ... I've been interested in ...?	5. ～...にずっと興味があります～?
6. ... I wanted to ...?	6. ～...したいと思っていました～?
7. ... I'm glad to ...?	7. ～...してうれしいです～?
8. ... in the future ...?	1. ～将来～?
9. ... we can ...?	2. ～私たちは...することができます～?
10. ... the experience of ...?	3. ～...の経験～?
11. ... speak three languages...?	4. ～3か国語を話す～?

図 1

3.3 アウトプット活動 (基本編)

Combination Activity

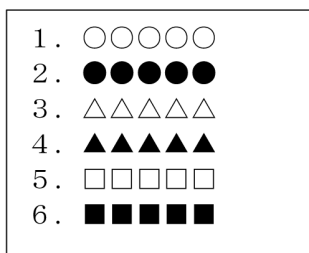
意味の区切り (チャンク) に分けたものを組み合わせて新しい文をつくる活動

- ①チャンク表 (図 1) のチャンクとチャンクを組み合わせて、新しい英文を作る。
- ②そのままでは組み合わせにくい表現は、意味が通る英文へ組みかえて英文を作ることも可能。

例文

チャンク 3 + チャンク 10
 = We should speak three languages.
 チャンク 8 + チャンク 4
 = We can (learn) the importance of (peace).

意味の区切り (チャンク) に分けたものを組み合わせて新しい文を作る。



↓

1 + 3 = _____
 5 + 2 = _____

Combination 活動では、表現の広がりには限定されるが、チャンク同士を繋げるために後に続く品詞や文法を確認させることができる。アウトプットの初級的な活動である。この活動では、英語が苦手な生徒でも大まかな意味さえ理解すれば、どの英文とどの英文がマッチングするかのイメージがつかみやすいという利点がある。

アウトプット活動 (応用編)

Expansion Activity

意味の区切り (チャンク) に分けたものに、自分のアイデアを足して新しい英文をつくる活動

- ①チャンク表 (図 1) のチャンクの前、または後ろに自分の知っている語を加えて、新しい英文を書く。
- ②制限時間内にできるだけ多くの文を書く。(5分程度)
- ③ペアで作った英文をシェアリングする。互いのアイデアを共有し次の活動につなげる。

意味の区切り (チャンク) に分けたものに自分のアイデアを足して新しい文を作る。



1 + X = _____
 X + 4 = _____
 1 + X + Y
 = _____

Expansion Activity 活動では、チャンクに知っている表現を加えて単文を書くことからスタートする。時間を限定することで、生徒はできるだけたくさん書こうと意欲的に取り組む。チャンクの表現をイメージして、それに繋がる語いや表現を考えることでその情景を広げていく。



例文 下線部はチャンク

生徒 A

Have you ever played soccer?

I've been interested in it since I was a little.

Why don't you go to the park to play it?

I'm glad to play with you.

生徒 B

I wanted to be a doctor.

I wanted to see pandas.

I wanted to be a vet.

I wanted to be a nurse.

生徒 C

Have you ever been to Okinawa?

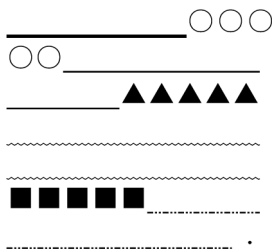
Why don't you go hopping with me?

I've been interested in basketball.

I wanted to watch TV with you.

生徒の書いた例文を紹介している。単文をたくさん書く活動であるが、慣れてくると生徒が一文からイメージをふくらませて関連性のある表現を書いている様子が分かる。生徒 A は、サッカーをテーマにしてチャンクを用いた繋がりのある英文を書いた。生徒 B のようにチャンクに繋がる語いをたくさん書く生徒もあれば、生徒 C のように完全に独立した英文を書く生徒もある。同じ指示を与え、ワークシートを用いて取り組んだ生徒のアウトプットが多岐にわたるのは、個々の想像力とやりくりに起因するところが大きい。

教師が選んだ3つのチャンクを含み、自分のアイデアを駆使して新たな物語を作る。



アウトプット活動 (発展編)

Advanced Expansion Activity

教師が選んだ3つのチャンクを含み、自分のアイデアを駆使して新たな物語（会話）を作る活動

- ① 指定されたチャンクを使い、ある程度意味の通ったストーリーになるように英文を作る。会話形式でも物語形式でも構わない。
- ② 制限時間は6分間。
- ③ 数名の生徒の英文をボードに書いて全体で共有する。

例文 下線部は指示されたチャンク

生徒 A

A: Have you ever been to Australia?

B: No, I haven't. I wanted to go there when I was a child.

A: Really? Me too. Why don't you go there this weekend?

B: Good idea! We will have a good time.

(37 語)

生徒 B

A: Have you ever been to New York?

B: No, I haven't, but I've been interested in New York since I was a little.

A: I'll visit there tomorrow. Why don't you go there?

B: Really? I'd love to.

(35 語)

生徒 C

I've been interested in sushi. Sushi is Japanese original food. When I have a good thing, I usually go to sushi shop. I think sushi is the most delicious food in the world. Why don't you go to sushi shop with me? (42 語)

生徒は実によく考えて英文を作っている。実際にはあり得ないであろう出来事を英文の中で面白く表現できることもこの活動の楽しさである。Why don't you ~? などを用いるには物語形式よりも会話形式でストーリーを考える生徒が多くみられた。指示するチャンクによって、会話の方が話題を展開しやすいものもあれば、物語としてイメージをふ

くませやすいものまでさまざまである。教師が指示するチャンクを使うことはもちろんだが、それに加えて自分の知っている語を引き出して、場面の中で使えるようにするために生徒たちは短い時間でさまざまなやりくりをして英文を書いている。スペルミスが見られたり、文法的に正しくない表現を書いたりすることがあるが、失敗をおそれずにどんどん発信させることがまずは大切なことである。Large Grammar 活動を行う中で、生徒たちは、授業で学んでいる英語がどんな場面で使われる表現なのかを考えて、「こんな場面で使えるな、いつか使ってみよう」という意識で学習に取り組むようになってきた。

学んだ英語を生徒が使えるようにする活動の一例として、Large Grammar 活動を紹介した。次に、各学年で取り組んだ授業実践の様子を紹介する。

4. 2年生の取り組み

4.1 はじめに

英語を学ぶ目標は「簡単な情報や考えなどを理解したり、表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力の育成」である。そこで2年生では①コミュニケーションを図ろうとするモチベーション、②コミュニケーションの手段としてのアウトプット活動、そして③コミュニケーションのための異文化理解を柱として取り組んだ。

モチベーションについては、毎年取り組んでいるグリーティングカード作り。そしてアウトプット活動については、Large Grammar の利用。特に本年度は日本語から英語へのアウトプット活動だけではなく、英語から日本語へのアウトプット活動にも重視していくこととした。

2年生で学ぶ英語もより複雑になり、生徒が目にする英文もこれまで以上に長くなっていく。目の前の英文を単なる文字として認識するのではなく、そこで書かれている内容をより深くつかむことを大切にし、「どう訳すか」から「何を伝えたいのか」に視点を移しながら、長文に触れるような取り組みにしていきたいと考えている。

4.2 問題の所在

英語教育においてコミュニケーション能力を高めるには、とりわけ「話す」「書く」といったアウト

プット活動を充実させることは当然のことである。しかし、生徒自ら自由にアウトプットするためには、それなりの知識習得や表現方法の獲得、つまりインプット活動を十分に行わなければならない。

しかし、気を付けなければならないのは、あることを表現するために、それに該当するインプットを一つ学習すればいいのではないということである。私たちが考えた思いや表現は、英語に変換すると様々な条件により多様な表現が考えられることを意識しなくてはならない。

4.3 言語の多様性に触れるやりくり

本学年の生徒は入学以来、英語表現の多様性について意識するような取り組みを行ってきた。例えば、相手のいった言葉が聞き取れずもう一度聞き直すときの表現は、教科書では「Pardon?」と書かれているが、決してそれ一つではなく、「Excuse me?」「I'm sorry.」なども日常では用いられる。ある一つのことを伝えるための英語は一つではなく、これまで学習してきた文法や語彙、様々な表現を用いることで、より自分の感情や思いが伝えやすくなる多様な表現があることも知ること大切である。これらの取り組みを重ねた結果、授業中に「この言い方でもいいですか。」「この表現は以前学習した表現とどう違うのですか。」といった発言をする生徒もみられるようになった。

普段の授業において、教科書で見かける新出単語や表現を学習するとき、それに対応する一つの意味(日本語)で紹介することが多い。例えば「I」は教科書では「私」と訳されることが多いが、その人物やキャラクター、性別によっては「僕」「俺」「あたし」など様々な日本語で訳されることの方が自然な場面もある。生徒にとっては1つの英単語に1つの日本語訳という関係を提示された方が理解しやすいかもしれないが、そのことが英語表現への弊害にもなりはしないだろうか。つまり、一つの日本語表現を英語で伝えるとき、その正解が一つしかないと考えてしまう傾向が生徒に見られるということである。上でも述べたようにそれぞれの言語の特徴を理解することで、日本語から英語、英語から日本語へのアウトプットの手助けになる取り組みを考える必要がある。

日本語から英語へ、英語から日本語へ。それぞれの言語をつなぐ多様な道を生徒に理解させるにはまだまだ時間がかかる。しかし、日々の授業や様々な取り組みを行うことで、生徒の意識が変容するのではないかと考え、日々実践を繰り返している。

教科書の各レッスンに設定されている長文読解を「オリジナル翻訳」という手法で取り組んでいる。様々な場面背景やキャラクターを深く理解した上で、自分なりの日本語翻訳に取り組む活動である。Let's Read 1「A Pot of Poison」は日本の狂言「附子」を中学生用に翻訳された題材である。言語の多様性に触れる適切な題材と考え、オリジナル翻訳に取り組ませた。

新学習指導要領においても【(2) 読むこと】において、「日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。」ことが目標として掲げられており、「概要を捉える」とは、例えば物語などのまとまりのある文章を最初から最後まで読み、一語一語や一文一文の意味など特定の部分にのみとらわれたりすることなく、登場人物の行動や心情の変化、全体のあらすじなど、書き手が述べていることの大まかな内容を捉えることが大切であると解説されている。

生徒にはまずその背景をつかませるために、それぞれの登場人物について理解を深め、その後翻訳活動に取りかかることとした。生徒は各ページの台詞を読み取り、その台詞を登場人物ごとに抜き出すことで、それぞれの性格を理解しようと試みていた(図1)。時には生徒同士で理解の相違が見られる場合には、お互いの意見を交わしながら話し合う姿も見られた。時代背景、和尚と小僧、話の展開など様々な視点で生徒は考えを深めながら取り組んだオリジナル翻訳は、どれ一つとっても全く同じものがない、個性に溢れた作品となった。(図2)

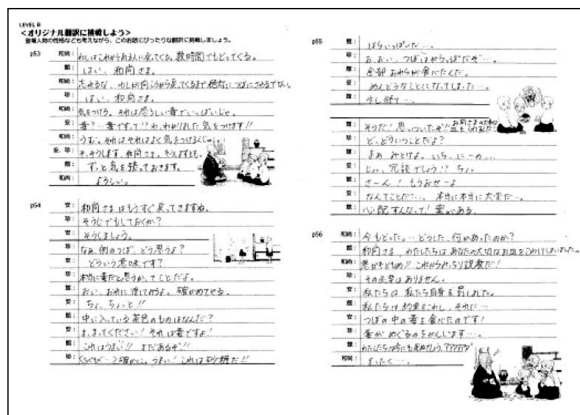


図2. 「A Pot of Poison」オリジナル翻訳

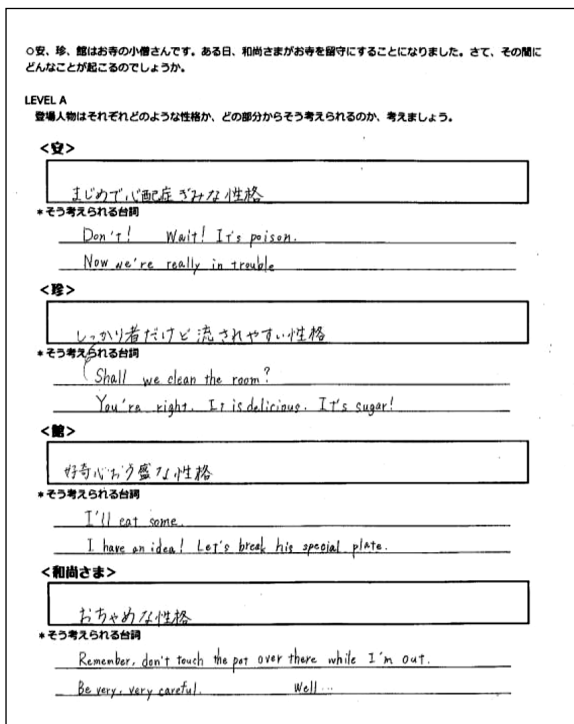


図1. 「A Pot of Poison」登場人物理解

さらにこの取り組みを理解で終わらせるのではなく、英語表現の活動まで発展させたかったため、最後にはこの物語のあらすじを英文でまとめた。(図3)

「書くこと」に苦手意識を持っている生徒は多い。それは、生徒が持っているこれまでの英語表現や語彙といったインプット量とライティング能力が比例していることや、正しい綴り、正しい文法を用いる事への抵抗もあるだろう。しかし、長文の要約については、オリジナルの英文をできる限り用いて、その表現に少しずつ変化を加えながらあらすじを述べていく活動であり、生徒への抵抗感は大きくない。またオリジナルのテキストから何を抽出し、どう表現し直すかは生徒の感性や考えに由来するので、誰一人として同じ要約文もない。そういった意味では、一つの目的となる活動に、生徒個々の英文ができるので、それぞれの違いを共有したり、生徒同士が考えをシェアしたりするには非常に良い活動だと感じた。

LEVEL C
 <物語のあらすじを書こう>
 本編の原作は狂言の「附子」。附子とはトリカブトから取れる毒のこと。原作では、小僧2人と主人との掛け合いが描かれています。A Pot of Poisonのあらすじを英文でまとめましょう。

Once upon a time there were three boys in a temple.
 Their names were An, Chin and Kan. One day...
 Master going to see someone. Master said, "Remember, don't touch the pot over there while I'm out. It's full of poison. very very careful." Three boys said, "Yes, Master?"
 Kan checked out the pot and said, "It's sugar."
 The boys ate all of the sugar in the pot.
 Kan said, "I have an idea." Kan broke the Master's special plate. The boys are in trouble. But, Kan is not in trouble. Kan said, "Don't worry. I have a plan."
 The Master came back. An said, "We punished ourselves."
 END...

☆今回のレポートに取り組んだ感想を書きましよう。

教科書に書いてある登場人物のセリフがその登場人物の性格を
 読み取ることができたが、LEVEL Cのあらすじは、早く読めず、その難
 した文を英語に訳すのが難しかった。
 いまオリジナル翻訳は、難しかったけれど、おかげで、海外へ来
 てもらった。

図 3. 「A Pot of Poison」要約文

4.4 手紙を書くというやりくり

先ほどの長文要約でも触れたように、生徒にとってアウトプット活動は容易なことではない。スピーキングでは、身振り手振りを交え、顔の表情や言い方、また多少間違った表現でもその意図が伝わればコミュニケーションとして成立するツールであるが、アウトプット活動、特にライティングについてはそうはいかない。自分が書き記した文字だけで、相手に伝えなければならないからである。そういった意味ではこの時期のライティング活動において、教師が考えなければならないのは「正確さ (Accuracy)」と「書こうとする意欲 (Motivation)」のバランスである。

そこでここでは、本学年が昨年度も取り組んだセレブレターの取り組みについて紹介する。

セレブレターとは、自分が好きな海外のアーティストやスポーツ選手に実際に手紙を送るという活動である。(図 4)

事前に生徒はインターネットなどの情報から送り先を調べ、その後学校でファンレターを書き、返信用の封筒を入れ、実際に自分の足で郵便局にもっていき、送る。学校での評価はファンレターづくりだけなので、実際に海外に送るかどうかは生徒自身に任せている。

実際に送る場合、生徒は自信が書き綴った手紙と返信用封筒を同封する。返信用封筒には生徒の住所を記しておき、後日返事が届いたときには生徒住所へ届くことになる。海外からの返信には時に夏頃となることもあり、非常に時間のかかることである。忘れた頃に自分が好きな海外のセレブから手紙が届くのはとても感動的であり、自分の英語が相手に届いたときの喜びは筆舌に尽くしがたいことである。そのような体験を繰り返すことで、自分の英語で表現することへの抵抗も少なくなり、意欲も高まるものである。

昨年度、1年時に過去の先輩の活動を紹介し、多くの先輩が海外のセレブから返事もらったことを紹介し、取り組ませたが半信半疑なところもあり、セレブレターを書くところで諦めてしまい、実際に送った生徒は例年に比べて少なかった。

しかし、その中でも実際に送った生徒には返事が返ってきたものも少なくなく、またその返事が返ってくる時期もまちまちで、遅いものになると昨年末に出した返事が今年の夏に返ってきたと生徒もいたらしく、「やっぱり返事が返ってくるんだ。」「今年は絶対に送ろう!」といった意欲的な反応もあり、かなりの手応えを感じている。

今年度は、昨年度の経験があるので、教師は何の指示もせず、「相手がその手紙を読んでどんな気持ちになるか想像して書きなさい」とだけ伝えた。そのような中で生徒の書いた手紙には昨年度には見られなかった変化が多く見られた。

まずは手紙のタイトルである。昨年度はクリスマスのメッセージということで生徒のほとんどが「Merry Christmas」という表現を用いたが、今年度は「Happy Holidays」という宗教的な意味合いに配慮するものが多く見られた。中学校での様々な学習を通して、世界の人々や多くの宗教的な問題などもしっかりと考慮したものと言えよう。

またその内容も中学2年生らしいものとなった。昨年度はこちらが提示した例文を多く用いて、どちらかと同じようなフォーマットで書かれたものが多く見られたが、今年度は先にも述べたように例文などの提示もしなかったため、生徒1人1人がこれまで学習した英語表現を最大限用いながら1人1人異なった英文を見ることができた。その中でも、I think/hope/ that …といった接続詞 that

を用いた文, また If you read this letter …や When I see you in this movie for the first time …などのように接続詞を多用する, これまでとは違う複雑で豊かな英語表現を見ることができた。

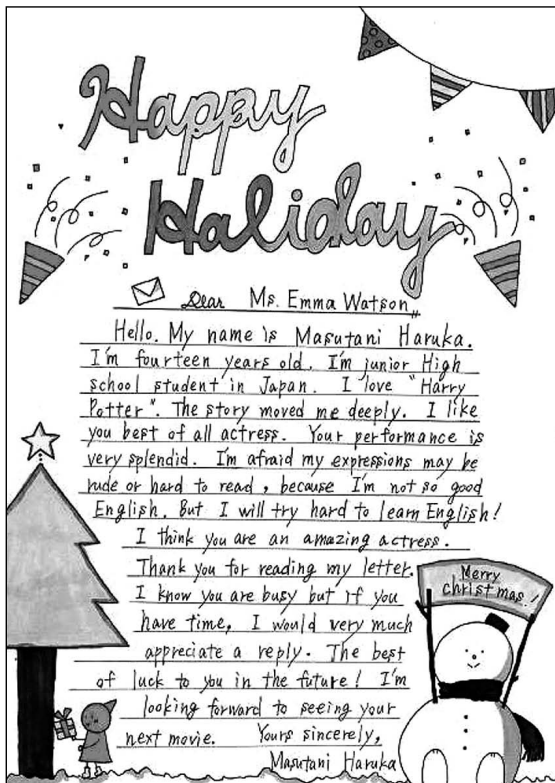
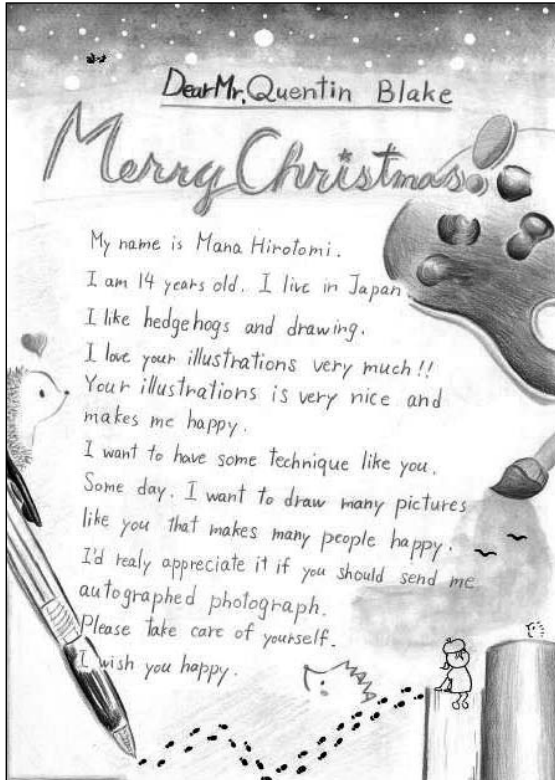


図 4. 生徒の作ったセレブレター

4.5 まとめ

英語を用いたコミュニケーションとは, 自分の考えや表現したいことを英語を媒介として相手に届けることである。今年度の取り組みを通して, 間違いを恐れず英語を書こうとする姿勢や意欲はみられるようになった。また日本語と英語は異なる言語であり, 英語を日本語で理解すること, また日本語を英語で表現することの答えは1つではなく, 多様なアプローチがあることも理解しつつある。

しかし, だからこそ生徒の表現活動に求められるものはより高度になる。時や場, またお互いの人間関係などにあわせた表現をその都度生徒自らが考えなければならないからである。

英語科にとっての「やりくり」とは, 単なる語彙力だけでなく, これまで以上にコンテンツへの理解度や状況・文化的背景など様々な視野で英語を見きわめていく力と考える。今後は, そのような視野の広さと文化的背景の理解度を深めていけるような教材づくりをしていきたい。

5. 3年生の取り組み

5.1 はじめに

3年生を迎えた生徒たちは, 英語をことばとして捉えるというよりは, 教科として見るようになったように思える。その最たる例が, 本年度最初に生徒に尋ねた「英語で最もつけたい力」についての返答である。昨年度は『話す力』と答えていた多くの生徒たちは, 「今年に入試があるので, 『聞く力』『読む力』『書く力』をつけたい」と考えるようになってきた。だからといって, 入試対策ばかりをするわけではなく, 今までと変わらず, インプットしたことをアウトプットするトレーニングを続けている。昨年度より意識している Quick Response (即興活動), 音読, 新出文法を使った活動の工夫, ディクテーション活動を継続しながら実践を行っている。

5.2 Large Grammar 活動を発展させる

かねてより生徒たちがやっている Large Grammar 活動をさらに発展させた活動を取り入れたことが本年度の新しい取り組みである。本校の研究発表大会に向け, 鳥取大学地域学部足立和美特命教授に助言をいただき, Large Grammar 活動の後に, Imaginary Interview を取り入れた。

方法は以下の通りである。

★チャンク表を使っての学習目標★			
① チャンク表の英語と知っている英語をやりくりして、オリジナルの文を作る。			
② チャンク表の英語いくつかを利用して、新しい物語を作る。			
③ チャンク表の英語を使って作った新しい物語に対して、英語で質問をしたり、質問に答えたりする。			
Lesson 3 Get Part 1			
1	do you have	1	～がありますか
2	a minute	2	ちょっとした時間
3	I've just finished	3	私はちよと終えたところです
4	my homework	4	私の宿題
5	I have two tickets	5	私は2枚チケットを持っています
6	for an English rakugo show	6	英語の落語演説の
7	why don't you	7	～しませんか
8	come with me	8	私と一緒に来な
9	I'd love to ~	9	喜んで～したいと思えます
10	I have been interested in ~	10	私は～に(ずっと)興味があります
11	since last year	11	去年から

- ① チャンクの音声確認 (ペア)
- ② チャンクを使ってのエクспанション活動
(チャンクに自分が知っている英語をつなぎ、新しい文を作る)
- ③ ②で作った文を共有する (ペア, クラス全体)。
- ④ チャンク表より, 教師が3つのチャンクを選び, そのチャンクすべてを利用して, オリジナルの物語を書く (使用順は順不同)。
- ⑤ ④でできた物語を共有する (ペア)。その物語に関わることや内容について, 英語で質問 (Imaginary Interview) をする。想像上のことなので, どんな質問でもよい。物語を書いた生徒は, その質問に即興で答える。話すとき, 困ったら Filler (well, let's see など) のつなぎことば) を使う。
- ⑥ クラスの中より1人を選び, その生徒が書いた物語を全体で共有し, それに対して Imaginary Interview を行う。

One day.
Mr A said " I have been interested in soccer. I want to go to soccer game this week end. Do you have tickets?" I bought two tickets so I said " Yes. I do. I have two tickets. Let's go to the soccer game with me." I felt happy because He looks happy too. I went to soccer game with Mr A. I had a good time. We'll go to again next month. Mr A will buy a ticket for me!

A1 : Which teams are going to play soccer?

B : Gainare Tottori and Gamba Osaka.

A2 : Do you like playing soccer?

B : No, I don't.

A2: Oh, really?

5.3 Error Correction について

どこかで生徒の書いた英語の間違いを訂正 (Error Correction) する場面があるかどうかの質問を受けることがある。Large Grammar 活動では, 大まかに書けることを目的としているため, 生徒たちのエラーを訂正することはほとんどない。自由に書かせる場面や昨年度より実施している英借文でも, 本人の希望がない限りはエラー訂正をせず, 書きっぱなしであることが多い。赤ペンでエラー訂正をされたワークシートやノートを生徒が見たとき, 少なからず, ショックを受け, 書くことへの意欲を失わせる恐れがあることから, エラー訂正をする活動とエラー訂正よりも書くことを優先させる活動とを分けている。新出文法を学習したあとの, インタビュー活動で話したり情報を得たりした英語は, 必ずワークシートに書かせることにしているが, そこで書かれた英語は点検し, エラー訂正をする。細かいエラーは各自で直すのだが, その文法に関わる致命的なエラーについては直せるまで提出し続ける方法をとっている。また, 教師が英語で質問し, 生徒が間違えた場合などには, 生徒が言った英語を正しい表現に直して繰り返した上で, 生徒の発表をほめるようにしている。

T : What do you see in this picture?

S : Boy is doing presentation.

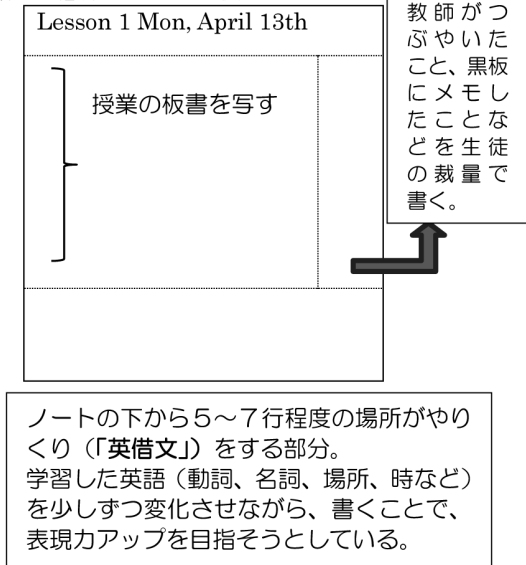
T : Yes, a boy is making a presentation. Well done!

一方, おしゃべりをしたあとに話した内容を英語で書く活動をするが, その書いたものは話したもののメモという捉えでいるため, エラー訂正はしない。また, 英借文についても, 学習した文法を使い, 元々ある文を少しずつ変えながら書くという目的があるため, 特に訂正はしないが, 英語を上達させたい生徒の中には, エラー訂正を申し出るものもあり, 英借文のエラー訂正を教師側ですることになっている。エラー訂正の有無が生徒の英語力に及ぼす影響がどんなものかまだ検証は行っていないが, 意欲により好意的に捉えられたり, また落胆させるものになりかねなかったりと, 難しい側面を持っていると考える。

英借文について, 昨年度の資料と同じものだが, ノートの使い方について載せておく。

英借文を意識したノートの使い方

英借文を意識したノートの使い方



It is easy for me to make rice balls.

ほくがおにぎりを作ることは簡単だ。

Class: No: Name: _____

☆「-が...することは一だ。」☆
It is easy for you to make rice balls. (私が(私にとって)おにぎりを作ることは簡単です。)
-が 簡単(簡単) (一だ) (一だ)

この形を使い、自分のことについてできるだけたくさん英文を書いてみよう。

easy _____

difficult _____

possible _____

impossible _____

interesting _____

necessary _____

important _____

fun _____

exciting _____

※ interesting 知的関心がそそられて興味・関心が出て「面白い」とき
fun 「面白い」(知的好奇心までいかななくても、純粋に楽しい時、その強弱の感じ上りのような意味合いの面白さにも使える。笑い転げて面白いときなど。)
上記にはないが、こんな形もあります。
enjoyable 喜びを覚えて「楽しい、面白い」とき
※上記の形は、人が主語になりません。× It is difficult to do sports.
□ It is difficult for me to do sports.

5.4 進出文法導入と英語を使う活動の工夫

新出文法を学習する際に、気をつけているのが、文法との出会わせ方とその文法を使った活動である。初出の文法を紹介する際には、生徒が推測しやすいよう、興味を引く写真や絵を見せながら、1～2分程度の英語を話して聞かせるようにしている。本年度であれば、bubble tea/boba (タピオカドリンク) や rolled ice cream (ロールアイス) などを登場させたり、海外のお祭りのことなどを紹介したりした。今年度は10月にイギリスのニューステッドスクールの生徒たちの本校への訪問もあったことから、イギリスのことも外せないものとなった。

① It is 形容詞 for 人 to 動詞の原形 ～

7月に学習したことから、新出文法を使い、7月4日のアメリカ独立記念日のことを紹介した。写真があることで、生徒も推測しやすく、また、興味を持って学習することができた。

It is wonderful to see a lot of fireworks from the boat on July 4th. You can buy fireworks at a stand, but it is expensive for you to afford it.

新出文法導入後は、文の形を考えながら、自分自身のことを英文で書く練習をした。

(活動のワークシートには、it is 形容詞の文で使う形容詞の使い方についての注意事項も確認した。)

自分のことを書いた後は、近くにいるクラスメイトとお互いのことを尋ね合った。

書いた英文を判別し、友達に質問をしてみよう。

A: It is easy for me to make rice balls.
What is easy for you?
B: Well, it is easy for me to make rice balls.
A: Oh, I see. Thank you very much.
B: You're welcome. / Not at all. / No problem.

Your Friends' Name	adjective	
	easy	
	difficult	
	impossible	
	interesting	
	necessary	
	important	
	fun	
	exciting	

上記で得られた情報をもとに、for のあとに友達の名前に代えて、英文を書いてみよう。全員が⑤までは、書いてみよう。

- ① _____
- ② _____
- ③ _____
- ④ _____
- ⑤ _____

Class: No: Name: _____

② 接触節

イギリスの生徒たちを迎えるにあたり、イギリスの若者に人気のあるファッションブランド・superdryについて紹介した。

Superdry is a fashion brand many young people in the U.K. like. Julian Dunkerton established it. When he was living in Japan, he often saw strange English words on the T-shirts Japanese people wore. He got an idea from them and started selling clothes with strange Japanese words.

イギリスの生徒の中にこのブランドのTシャツを着ている生徒があり、生徒たちも興味をもっているようであった。

新出文法導入後は、接触節を使った文を使い、好きな映画について友達に尋ねるインタビュー活動をを行った。

Let's talk about our favorite movie!

Class: No: Name:

What's the best movie you've ever seen?
 B: "Stand by Me" is the best movie I've ever seen.
 Q: What did you like about it?
 B: I liked the story.
 Q: What did you learn from it?
 B: I learned about friendship.
 I learned that friends are our treasure.

単語のつりかえ
 story 物語
 story 物語
 treasure 宝物
 treasure 宝物
 treasure 宝物
 treasure 宝物
 treasure 宝物

単語のつりかえ
 story 物語
 story 物語
 treasure 宝物
 treasure 宝物
 treasure 宝物
 treasure 宝物
 treasure 宝物

Ask your friends about their favorite movie.

Your Friend's Name	The Title of the Movie	What She/He Learned
①		
②		
③		
④		
⑤		
⑥		
⑦		

※Writing※ 集めた情報を元に、友達が好きな映画について書いてみよう。

The movie Mr. Fukushiro likes is Mr. BOO. (現代先生が好きな映画はミスターブーです。)

① _____
 ② _____
 ③ _____
 ④ _____
 ⑤ _____

5.5 英語を使う活動を「言語活動」に発展させる

5.4で紹介した例は、生徒が意欲的に活動してはいるものの、新出文法の文型を覚えるために繰り返して英語を使う活動にしかとどまらず、「言語活動」と呼ぶには、ほど遠い。新出文法を使い、生徒が自発的に英語を話す活動をよ

り多く考案していきたいと考える。Information Gap 活動(情報の違いを利用した活動)はその中でも有効な方法の1つだと考える。

現在分詞(前置修飾、後置修飾)を学習した後、次のような活動をした。絵は同じだが、それぞれのワークシートの人物の名前欄の空欄部分がペアで異なる情報となるため、現在分詞を用いた英文を話し、ペアにその人の名前を聞き出して行く。

Who is the boy playing tennis? Class: No: Name:

① Who is the boy playing tennis?
 A: The boy is swimming. (聞いていないので聞きかたです。)
 B: He is Jim. (聞きかたです。)

② (質問) Who is the girl playing tennis?
 A: The girl is swimming. (聞いていないので聞きかたです。)
 B: She is Sara. (聞きかたです。)

単語のつりかえ
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳

単語のつりかえ
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳

A : Who is the swimming boy?
 B : He is Jiro.
 A : Who is the girl playing tennis?
 B : She is Sara.

Who is the girl playing tennis? Class: No: Name:

① Who is the girl playing tennis?
 A: The girl is swimming. (聞いていないので聞きかたです。)
 B: She is Sara. (聞きかたです。)

② (質問) Who is the boy playing tennis?
 A: The boy is swimming. (聞いていないので聞きかたです。)
 B: He is Jim. (聞きかたです。)

単語のつりかえ
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳

単語のつりかえ
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳
 swimming 水泳

実際に活動をやってみた生徒たちは、後置修飾がうまく活用できず、すべて前置修飾で片付けようとしている者もいたが、後置修飾との違いに気づかせることで軌道修正し、情報集めを続けることができていた。集まる情報の数が多いため、英語を得意とする生徒でもやりがいを感ずる活動であったようであった。

また、普段インタビュー活動をさせる際に、ど

のように発展的な形になるのかを考えてきている。しかしながら、なかなかうまく発展させられず、どんな内容を尋ねられるか予め分かっているものに対して、生徒たちがそれぞれの答えを英語で伝えるというものが多かった。今回の試みは、生徒それぞれに3色の異なったワークシートを持たせ、自分の持っているワークシートとは異なった色を持っている生徒にインタビューをするというものである。予め質問されることが分かっている以前のインタビュー活動では、英語をいい加減に話していることが多かったが、今回の試みでは予めどんな質問をされるかが分からないため、生徒も真剣に相手の言うことを聞こうとしている姿が見られた。

間接疑問文を使ったこの活動は、まだまだ改善の余地があると考え。質問の内容が、歴史上の出来事や生徒が好きなスポーツ選手やアイドル等についてであったため、特に授業中に英語で話をする必然性を感じない内容となってしまったことを反省している。英語を使い、質問されたことに即興で答えられるという部分は達成できたが、その話す内容についても今後考えていく必要がある。

また、関係代名詞・主格の文法を使って、クイズを考え、問題を出し合う活動も行った。

Do you know when Columbus reached America?

Class: No: Name:

A: Excuse me, do you know **when** Columbus reached America?
 B: Yes, I do. He reached America in 1492. B: I'm sorry. I don't know when he reached America.
 A: Thank you! / Thank you so much! / Thanks. A: That's OK. I'll ask someone. Thanks anyway.

Question	Your Classmate's Name who answered "Yes"	His/Her Answer
1 Do you know where the first Olympic games were held?		
2 Do you know when our school's "anniversary" is?		
3 Do you know who the first shogun in the Edo period is?		
4 Do you know where "Hakuba" is from?		
5 Do you know how many cities Tottori has?		
6 Do you know when Battle of Okhotsk happened?		
7 Do you know who made the first "pot noodle"?		
8 Do you know what story Dazai Osamu wrote?		

*anniversary (アニヴァーサリー) 記念日, 今頃は学校の創立記念日 *Hakuba: 白馬 (ウチ) *pot noodle: カップヌードル

Do you know when Columbus reached America?

Class: No: Name:

A: Excuse me, do you know **when** Columbus reached America?
 B: Yes, I do. He reached America in 1492. B: I'm sorry. I don't know when he reached America.
 A: Thank you! / Thank you so much! / Thanks. A: That's OK. I'll ask someone. Thanks anyway.

Question	Your Classmate's Name who answered "Yes"	His/Her Answer
1 Do you know where the last Olympics and Paralympics were held?		
2 Do you know when Christmas Eve is?		
3 Do you know who the first Japanese "Prime Minister" is?		
4 Do you know where "TWICE" is from?		
5 Do you know how many prefectures Japan has?		
6 Do you know when Battle of Sekigahara ended?		
7 Do you know who first found "radium"?		
8 Do you know what story Murasaki Shikibu wrote?		

*Prime Minister: 総理大臣 *TWICE (トゥワイス): 女性歌手グループ *prefecture: 県 *radium (レイジアム): ラジウム

Do you know when Columbus reached America?

Class: No: Name:

A: Excuse me, do you know **when** Columbus reached America?
 B: Yes, I do. He reached America in 1492. B: I'm sorry. I don't know when he reached America.
 A: Thank you! / Thank you so much! / Thanks. A: That's OK. I'll ask someone. Thanks anyway.


Question	Your Classmate's Name who answered "Yes"	His/Her Answer
1 Do you know where the next Olympics and Paralympics will be held?		
2 Do you know when the Valentine's Day is?		
3 Do you know who the first "American President" is?		
4 Do you know where "Messi" is from?		
5 Do you know how many "states" the USA has?		
6 Do you know when World War II ended?		
7 Do you know who made the first plane?		
8 Do you know what "Edison" invented? Tell me one.		

*American President: アメリカ大統領 *Messi (メッシ): メッシ (サッカー選手) *states (ステイツ): 州 *Edison (エドイソン): エジソン


I live with the owner who uses Shibuya Station every day.

Class: No: Name:

***クイズの作りかた**
 ヒントは3つ用意する。左まがなヒントから、だんだん答えに近れるようなヒントにする。解答のヒントでもよいので、必ず「-した人 (-する人) の名前を言うこと」
 ex) I live with the owner who uses Shibuya Station every day.
 彼は毎日の通勤を彼(主)と一語に暮らしています。
 主辞については、その人を好き This person を使ってもよいし、出題者がその人物になりきって、I を使ってもよい。逐て出すクイズ全体で統一して使うこととする。
 ex1)



1st Hint: I'm an animal.
 2nd Hint: I'm always waiting for my owner.
 3rd Hint: I live with the owner who uses Shibuya Station every day.



1st Hint: This person was born in Tokyo in 1867.
 2nd Hint: This person lived in London for about two years.
 3rd Hint: This person is the writer who wrote Shogun.

This is the man who established the Kamakura Shogunate in 1162

Class: No: Name:

This man was born in Nagoya.
 He died in 1199, when he was 51.
 He is the man who established the Kamakura Shogunate in 1162.
 establish the Kamakura Shogunate: 鎌倉幕府を樹く

Who? _____
 1st Hint: _____
 2nd Hint: _____
 3rd Hint: _____

Who? _____
 1st Hint: _____
 2nd Hint: _____
 3rd Hint: _____

Who? _____
 1st Hint: _____
 2nd Hint: _____
 3rd Hint: _____

Who? _____
 1st Hint: _____
 2nd Hint: _____
 3rd Hint: _____

学習した文法に沿い、少しずつヒントを考えていく。人物でもよいし、身の回りにあるものでもよい。だんだんと核心に迫りながら3つのヒントを考え、そのヒントの中の1つに関係代名詞を含んだ文章を書くのが目的である。生徒が書いたものをいくつか紹介する。訂正前のものなので、エラーがあるものもある。

錦織圭

Who?	Nishikori Kei
1st Hint	I was born in Shimane.
2nd Hint	I practiced in America when I was child.
3rd Hint	I'm a tennis player who was taught by Mr. Matsuda.

クイーン

Who?	Queen
Hint	We are from the UK.
1st Hint	We are loved all around the world.
1st Hint	We are the group that sing We Will Rock You.

田中角栄

Who?	Kakuei Tanaka
1st Hint	This person is politician.
2nd Hint	This person promise in 1972.
3rd Hint	This person who made good connection with China.

トランプ大統領

Who?	Donald J. Trump
1st Hint	This person likes fast food very much.
2nd Hint	This person tweets a lot almost every day.
3rd Hint	This person governs the country that is the biggest in the world.

のび太くん

Who?	野比のび太
1st Hint	This person is character in manga.
2nd Hint	This person's birthday is August seventh.
3rd Hint	This person is the boy who lives with Doraemon.

バタコさん

Who?	バタコさん
1st Hint	This woman is an animation character.
2nd Hint	She makes bread very well.
3rd Hint	She throws anpan's head which was made by her.

関係代名詞・主格の文法を必ず使うという制限があったものの、生徒の多くが学習したことをやりくりして英語を書くことができていた。細かい間違えはあるものの、大まかに意味が通じる英文が書けていた部分では、Large Grammar 活動と通じるものがあつた。

5.6 「やりくり」披露の場その1

3年生になったことで、学習した英語が増え、生徒たちも書きたいことを「自分で書く」ことができるようになったことを実感している。2年生の時にしたスピーチでは、伝えたいことが自分の力で書けず、悔しい思いをしている生徒もいた。今年は、辞書を使うことはあれ、自力で書くことができ、英語を書く表現の幅が広がったことに自身の成長を感じている生徒が多かった。またプレゼンテーションを意識し、visual aid を使ったスピーチに挑戦し、自信をつけた。そんな中でも、生徒たちが特に楽しみにしている発表活動に、学習した英語を使い会話や劇を創作し、発表するものがある。

生徒たちがペアまたはグループで、教師に与えられたテーマや文法や使用表現により、物語や会話を作り、クラス全体で発表するものである。昨年度は、教科書をなぞるものが多かったが、本年度は昨年度よりも少し厳しい条件(時間を長く会話する、お互いの準備とは違った部分での即興のトランプをペアにかけるなど)で挑戦させている。生徒たちが意欲的に取り組めるのも、お互いの発表を楽しみながら見ていることも、生徒たちが各クラスで良い人間関係を築いてきている証拠だと考える。自分たちの考えた物語を、英語を駆使して発表し、仲間より賞賛を受けることで、英語を使うことへの壁がだんだん低くなってきているように感じる。卒業まであと残り少ない期間ではあるが、生徒たちに発表の場を提供したいと考えている。

5.7 「やりくり」披露の場その2

—ニューステッドウッドスクールの生徒たちを迎えて—
本年度のやりくりの見せ場は、10月に行われたイギリス。ニューステッドウッドスクールの生徒たちとの交流である。3年生は、理科、美術、英語の授業で交流し、自分たちの英語がいかなるものなのかを試す絶好の機会を与えられたのである。普段聞いている英語がアメリカ英語であるため、事前にも練習したイギリス英語を聞く活動では、普段聞いている発音との違いに驚き、イギリスの生徒を受け入れることへの不安がある生徒もあつたようだが、それを払拭するくらい、生徒たちは準備を丁寧に行っていた。英語の授業では、主に日本の伝統的な遊び(けん玉、コマ、すごろく、福

笑い、折り紙)の体験ブースを用意し、全体ではじゃんけん列車とフルーツバスケットをやった。すぐろく、福笑いは自分たちで作成し、英語での説明の準備などを入念に行っていた。ところが、実際に交流が始まると、準備したことよりも即興で対応しなければならないことが多く、生徒たちもあたふたとしている様子が見られたが、自分たちが知っている英語をやりくりし、伝えられたことで、大きな自信につながったようであった。

事前に、話す英語の準備をして臨んだ生徒たちではあったが、それらの英語はあまり役に立たず、過去に勉強し頭の中に残っているものを引っ張り出し、やりくりをしてその場で会話をつなげることのほうが大事だったという印象を受けた生徒たちが多かった。



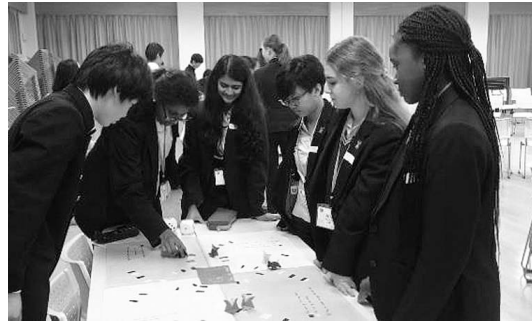
じゃんけん列車の様子。Rock, scissors, paper, go! と言いながら、ウォーミングアップ。



けん玉の体験。似たような遊びがスペインにもあるようで、イギリスの生徒たちは果敢に挑戦していた。“I'll show you how to play kendama.”



本校の生徒たちが作った福笑いをイギリスの生徒たちに楽しんでいる。うまくできると、すかさず英語でほめことばをかける。“Nice!” “Very good!”



こちら本校の生徒たち作成のすぐろく。イギリスの生徒たちに遊び方を説明しながら楽しんでいる。



折り紙の体験ブース。「折り紙の説明をくどくどとする必要はなかった」と、生徒からの感想。困ったら、“Do like this.”と見せるのが手っ取り早かったようだ。



学習したばかりの関係代名詞を使ってフルーツバスケット。



日本でのラグビーワールドカップ開催に合わせ、“someone who likes rugby”と言ってみたものの、誰も立ち上がってくれず、途方に暮れる生徒。

5.8 おわりに

英語はことばである、と生徒に言い続けて2年が経とうとしている。ことばであるからこそ、やりくりの幅も広がるが、その広げ方が難しいときもある。また、自分が伝えたいことを外国語で話すという喜びと受験に必要な教科であるという狭間で、生徒たちは学習を続けている。この2年間で提示してきた様々な学習法ややりくりの手段を、今後の英語学習にも生かし、受験や時代の流れに振り回されない普遍的な英語力を生徒たちが身につけていくことを望んでいる。

【参考文献】

著者(発行年)『タイトル』出版社 の順

足立和美(2016)『地域教育学研究 8巻1号』鳥取大学地域教育学科

足立和美(2014)『地域教育学研究 6巻1号』鳥取大学地域教育学科

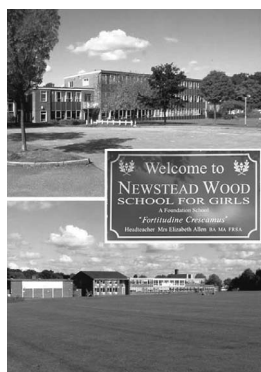
澤井陽介(2017)『授業の見方』東洋館出版社

藤村宣之ほか編(2018)『協同的探求学習で育む「わかる学力」』ミネルヴァ書房

6. 国際交流

6.1. 交流が始まるまで

本校は2014年度より英国のニューステッドウッドスクールの生徒と文通交流を始めている。それ以前は教員同士の交流が行われていたことに加えて生徒同士でも交流ができたという両校の教員同士の提案で手紙を通したやりとりが交流のスタートとなる。翌年の2015年には、国際交流プログラムで日本語の授業を選択し学習している英国生徒が研修として来日した。日本語を選択している生徒の日本への研修旅行が2年に一度行われることに際して、日本文化や日本の学校生活を体験するプログラムを本校で行いたいとの申し出をいただき、2015年度、同校と1回目の国際交流プログラムが実現し、現在に至る。



6.2. ホストファミリーの募集

国際交流プログラムで来日時の生徒の滞在は、本校生徒の家庭に滞在するホームステイが基本となる。鳥取に滞在する10月23日から26日までの3泊4日、ホストファミリーの受け入れが可能な家庭の募集を5月より開始した。受け入れ経験のある家庭や、初めて受け入れに申し込む家庭があった。本校PTAである懇話会の協力も得ながらホストファミリーが決定した。

6.3. 事前説明会

ホストファミリーの保護者、生徒を対象にした説明会を9月下旬に開催した。今までの交流の経緯や今年度の交流日程、ホームステイ時の注意事項などの説明や、実際に受け入れをお願いする生徒の情報を渡し、食事や健康面での配慮を依頼した。英国生徒は、授業で日本語を選択している生徒であり、日本文化を学ぼうと来日する。互いの文化を尊重し、理解しようとすることでコミュニケーションが図れることを伝え、視野を広げるチャンスととらえて前向きにホストファミリーにチャレンジされる家庭が多く感謝している。

6.4. 国際交流プログラム

本年度は、全クラスの生徒との交流時間を計画し、英語だけでなく、さまざまな教科で交流授業を行うことができた。交流中に使用する言語は日本の生徒はできるだけ英語を使い、英国の生徒は日本語で発表するように努めた。互いの言語や文化を尊重し、学び合おうとする姿勢がどの授業でも見られ有意義な交流となった。



第1日目 10月23日(水)	
時刻	日程
8:10	登校
15:52	鳥取駅着 スーパーはくと
16:00	鳥取駅発 鳥大前着
16:10	英国生徒 鳥取駅到着
16:30	歓迎セレモニー
	解散
第2日目 10月24日(木)	
時刻	日程
8:10	登校
8:15	朝の連絡
1校時	歓迎式典 生徒会主催
2校時	教科 英語 学年 2年 AB組
3校時	教科 理科 学年 3年 AC組
4校時	終学活 下校
昼食	英国生徒と ホストファミリー 大学学食でランチ
14:00 }	砂丘散策
16:00	砂の美術館見学
16:30	下校

歓迎式典



吹奏楽部の歓迎演奏, 3年生有志による和楽器演奏など, 生徒全員の拍手に包まれた温かい歓迎式典を行うことができた。どの生徒も英国生徒の来日を心待ちにしていた様子うかがえる温かい出会いの時間となった。



図1 理科話 ワークシート

3年生の理科の授業では, 毎時間の始めに「理科話」を英語で行っている。交流授業では, その集大成として日英の代表生徒たちによる「理科話」のプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの後には聞いた感想や分かったことなどを書き, 発表者へのフィードバックも行われた。(図1)

今回, 初めて理科の交流授業が実現した。授業者の服部教諭が毎日の帯活動で行っている内容に加え, 英語科の金森教諭がプレゼンテーションに必要な表現を助言することにより生徒たちが自信を持ってプレゼンテーションに臨むことができた。英語の授業で交流することでコミュニケーションの場面は生まれるが, 他教科での学び, 身につけた成果を発信することも大切なことである。理科の交流授業では, 両国の生徒がすばらしい発表を行った。それは, 発表者だけでなく, 聞いている生徒全員にとっても深い学びを得られた授業であり, 理科に関する興味はもちろん, 英語を運用して話すことへの十分な動機づけとなった。英



語はコミュニケーションのツールの一つであり、発信内容を他教科での学びにすれば、どの教科での交流も実現可能であると考えられる。英語科は、今後の交流授業でも他教科と連携していきたい。

第3日目 10月25日(金)	
時刻	日程
8:10	登校
8:15	朝の連絡
1校時	教科 書写 学年 2年 CD組
2校時	教科 英語 学年 3年 B組
3校時	教科 英語(学活) 学年 1年 全クラス
4校時	教科 美術 学年 3年 D組
給食	多目的で給食
5校時	教科 保体 学年 1年 CD組女子
6校時	振り返り
16:30	下校

書写



図2 2年書写

美術



図3 3年美術 紙の染色

保健体育



図4 1年女子保健体育 ソーラン節

見送り



第4日目 10月26日(土)	
時刻	日程
8:00	鳥取駅 集合
8:10	お別れの会 (JR 鳥取駅会議室)
8:30	お見送り
8:53	鳥取駅出発
9:00	解散

様々な教科で交流授業を行い、附属中学校の普段の学びを英国生徒と発信し共有する時間を持った。言葉でのやりとりはもちろん、ジェスチャーを用いたコミュニケーションも活発に行われた。日本文化(書写やけん玉、すごろく、ソーラン節など)の紹介では、本校生徒が現物を示して実際に使ってみたり、使わせてみたりすることに加えて、知っている語いで説明を行っていた。交流の後、生徒たちは交流で自分の意図が相手に伝わった喜びを感じるのと同時に、知っているけれど使えない語いが多いことに気づく。交流が生徒たちの学びのスタートとなったことは言うまでもない。

6.5. 交流を終えて

生徒アンケート（生徒の振り返り用紙より）

- 英国の学校制度や授業のことを聞いて楽しかったです。驚いたのは体育でボクシングを選択できることです。
- 正しい英語は全くできていなかったと思うけど、伝えよう!とすると伝わるんだなあと実感しました。初日は緊張してあまり会話は続かなかったです。でも2、3日目は慣れてきて英国の話とか家族の話をしたりできました。
- 文法にとらわれすぎず、知っている言葉を使う努力をすると相手に伝わるようになったし、相手が伝えたいことが分かるようになりました。積極的に話すことが英語の上達にもつながるし、関係を深められるということが分かりました。もっと英語の勉強を頑張りたいという気持ちが強まりました。
- 英語でコミュニケーションを取る楽しさを感じることができました。まずは笑顔が大事なんだなと思いました。話したことがない人でも笑顔を向ければ話しかけてくれました。
- 今回、2回目の受け入れをさせてもらいました。1年生で受け入れをしたときに比べて、うまく英語が話せて自分の成長も感じることができました。自分もいつか英国に行きたいと思えました。
- 連絡先を交換しあったので、今もメールでやりとりをしています。また会おうと約束したので長い間交流を続けていきたいです。
- 今回のホームステイを通して、語学力の重要性よりも伝えようとする気持ちの大切さを感じました。伝えようと努力すれば相手も理解しようとしてくれます。加えて、英語の単語数や使いまわし、あいづちなど会話をするにはまだ不十分なところを自分でたくさん発見できました。将来、海外に行って勉強をしてみたいです。海外の文化や歴史を体験したいです。今回のホームステイは私に目標をくれました。ホームステイをして良かったと本当に感じます。



保護者（ホストファミリー）アンケート

受け入れの感想

- 英語を普段使う機会がないので、とてもいい体験になったと思う。ホームステイの後、「これは英語でなんて言うの?」とよく聞かれるようになり、英語への興味が深まっているように感じた。
- 日本のことを伝えようとする中で、改めて自国の文化や地域、生活について見直し深く考える契機となったことや、言葉の壁があっても何とかして伝えようと一歩を踏み出す中でコミュニケーションが取れることを体感できた点が良かったです。
- 家族全員が楽しく過ごせました。鳥取の説明、名探偵コナンや折り紙を通して子どもたちは交流できたようです。
- 異文化に触れることで刺激も生まれ、家族や親同士が話をする機会も増え良いコミュニケーションの場となりました。

困ったこと

- 日本の何に興味があるのかを事前に聞いておくべきだった。
- 一緒にしたいことがありすぎて時間が足りなかったこと。
- 平日のホームステイだったので、どこかへ連れて行くことができず少し残念な思いがあります。

食事について

- 何を料理すればいいのかメニューを考えるのに苦労しました。実際には何でも残さず食べてくれて心配しすぎた印象でした。
- 朝食で目玉焼きを作ったら食べられず自身だけ食べて黄身は残りました。ゆで卵だったら食べられたそうなので事前に聞いてあげればよかったです。
- 事前に食べたいものを教えてもらっていたので、メニューはあらかじめ決めていた。また、牛肉はNGだったものの「他は何でも挑戦してみたい」と言ってくれたのでまったく問題なかった。
- 前日までのステイ先の食事と我が家での食事が同じようなものだった（寿司、てんぷら）ので、本人に確認して少し変更しました。たまにはパンも食べたいかなと思い、パンかご飯か選べるようにしたときもありましたが、ご飯を選んで食べていました。

気づいたこと

- ペンパルで交流をさせていただいた分、お互いを少しずつ理解しながらの受け入れであったことはこちらとしても安心感は大きかったです。
- 鳥取での滞在がほとんど大雨となってしまう、少しかわいそうな気もしました。体調を崩すことなく元気にすごしてくれたことが何よりでした。娘にも貴重な経験となり家族全員での一生の思い出となりました。
- 日本に来ていただくだけでなく、日本の生徒が英国へ行くことができるプログラムならいいのになと思いました。
- とてもまじめな生徒さんでピアノもとても上手でした。お手伝いもしてくれて子どもたちにはお姉さんのような存在として見本になりました。早寝早起きもされていて困ることはありませんでした。
- 英国の文化を知ることができたのはとても有意義なものとなりました。学生さんにこたつや寝具、日本家具について喜んでもらえたようこちらもうれしく感じました。
- 2年前の受け入れでは翻訳アプリに頼ることが多く本人も英語が話せないことを自覚していました。今回は受け入れまでに、ペンパルで交流をしていたので翻訳アプリに頼らずに会話をしよう決めていました。私たちが思っていた以上に、会話の上達を感じた日々でした。先生方のご指導によるものと感謝しております。

6.6. 交流を終えて

英国ニューステッドウッドスクールで日本語を選択している生徒が行う日本研修のプログラムには、東京、神奈川での交流に加えて、鳥取での交流プログラムが計画されている。「なぜ鳥取へ？」英国での保護者説明会ではそんな質問も出ると担当者より聞いた。外国の人へ「日本」を伝えるときに、首都である東京や古都である京都の神社仏閣を紹介することは多い。そんな中で英国訪問団が鳥取へやってきて鳥取大学附属中学校との交流をするのは、そこに人と人との縁が存在することに他ならない。はじめに、で述べたようにニューステッドウッドスクールと鳥取大学とは教員交流をスタートに交流を始め、生徒同士の交流ができたらとの願いから日本研修のプログラムに鳥取への訪問が計画された。

今回の交流では「鳥取の魅力」や「日本人らしさ、あたたかさ」を附属中学校の生徒全員で、そして英国生徒の滞在先であるホストファミリーのみなさんと英国生徒へ示すことができたように思う。

今年度国際交流を経験した1年生の生徒が2年後、3年生になったときに再び交流できることを信じ、その場面で自分の成長を感じることでできる交流ができることを願う。本校の生徒たちであれば、異文化を受け入れること、外国の方を心からもてなすことができ、積極的に自分や自分の住む町、国の魅力を十分に発信できる力があると信じている。



7. 国際交流のこれから

交流事業は今回で3度目となった。両校の担当教師が互いに感謝を伝え合ったあと、「交流はここからがスタートですね」の一言で締めくく。今回の交流を通して、今後学習への意欲や外国への興味を抱いたり、ペンパル交流をしてみたいと願う生徒が出てきたりとまさに生徒たちは今後の交流へのスタート地点に立っている。実際、ペンパル交流や2年後のホストファミリーとして今から意欲を見せる生徒もある。2年後の本校での国際交流を心待ちにしつつ、それまでの日英の生徒同士の交流がますます活発なやりとりになることを願っている。

2019 国際交流

鳥取大学附属中学校
x
Newstead Wood School
ニューステッドウッドスクール

10月24日 (木)

- 1 限 歓迎セレモニー
- 生徒会メッセージ
- 茶道部点前披露
- 和楽器演奏
- 2 限 2年A組 英語
- 3 限 3年AC組 理科

午後 鳥取観光
鳥取砂丘
砂の美術館

10月25日 (金)

- 1 限 2年CD組 書写
- 2 限 3年B組 英語
- 3 限 1年全クラス 英語
- 4 限 3年D組 美術

給食(多目的室)
ホストファミリー生徒
ペンパル生徒
英国生徒で会食

- 5 限 1年CD組女子 保健体育
- 6 限 振り廻り

イギリス: ニューステッドウッドスクールより生徒21名が来校し、鳥取大学附属中学校で交流を行います。2日間、学年やクラスで様々な交流が予定されています。各自持ち物のことを念入り、両校生徒の両方を意識し、互いに思いやりを持って交流してください。全生徒が参加できる企画も盛り込んで、思い思いの学びを実感できる国際交流にしたいと考えています。

令和元年度
鳥取大学附属中学校



英語科 学習指導案

公開学習 1 9:40~10:30
Large Grammarを通して身につけるやりくり力
授業者 金森 玲子 会場 3年B組教室

公開学習 2 10:40~11:30
私の国際交流 ～相手を意識したやりとりを通して～
授業者 竹川由紀子 会場 1年C組教室

研究協議会 11:45~12:45
会場 1年C組教室

(公開授業 I) 第3学年A組 英語科学習指導案

授業者 金森 玲子

3年A組教室

1 題材名 *Rakugo Goes Overseas* (New Crown English Series 3, Lesson 3)

2 教科・題材における「やりくり」

一般的に、インプットした英語のすべてをアウトプットできるようになることは簡単なことではなく、意味を受動的に知ってはいるが、能動的に話したり書いたりするときに使うことができないことが多い。本授業は、鳥取大学特命教授足立和美先生が提唱されている **Large Grammar** の手法を用い、既習の英語を利用することで、新しい文章を作るトレーニングをすることが目的である。また、目標は、英語を使うためのきっかけとなるチャンク(教科書で既習の本文を意味ごとに区切ったもの)を与え、生徒が、そのチャンクから連想する英語を駆使し、チャンクの前後に英語を付け加えて大まかに意味が通じる新しい文を作ったり、与えられた三つのチャンクを利用して、つながりのある物語を書いたりすることができるようになることである。この活動を通して、習得した英語を、書いたり話したりすることに利用できるようにするトレーニングを提案している。辞書や教科書を使うことなく、自分の既知の英語を呼び起こすことで、いわば英語をリサイクルするかのようやりくりができるようになることを狙っている。

英語が使えるようになるためには、既習の英語をやりくりしてみることは不可欠だと考え、そのため、学習した文法や語句を使い、ペアで会話を作り発表する機会を与えたり、ノートの使い方を工夫し、自主学習の一つとして学習した文法や語句を使い新たな英文を書く「英借文」をしたりしている。

(1) 教師と教材

現行学習指導要領では、思考力、判断力、表現力等に関する項目での外国語の目標は次のように設定されている。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

また、本題材は学習指導要領の次の内容の達成に位置づけられる。

2 内容

(1) 言語活動

- イ 話すこと (エ) つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。
- エ 書くこと (イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。

本題材では、現在完了の完了用法及び経験用法、不定詞の感情の原因や理由を表す副詞的用法が主な学習文法項目となっている。現在完了の継続用法については前課において、また不定詞の名詞的用法、副詞的用法、形容詞的用法については2年時に学習済みであるが、チャンクを利用することで、文法知識そのものにこだわることなく、教科書の本文に使われている英語から連想する内容を表現していくことを目的としている。これには、生徒が書きたいことを自由に表現できる利点がある。また、習得した知識を使うことで、頭の片隅で眠っていた英語を呼び起こして活用するきっかけにもなると考えられる。

本授業では、生徒が書いた物語について相互に質問をさせることで、質問をする生徒やそれに答える生徒

に即興で答えさせる QR (Quick Response:クイック・レスポンス) 活動にもつなげられると考えているが、それが難しい場合には、つなぎことばの Filler(Well, Let's see など)を利用することで、何とか会話を途切れさせないようにする姿勢も持たせたいと考えている。生徒は、相手の発言を繰り返し聞くことでも過去に学習した英語を呼び起こすことができると考える。そのため、授業中は生徒が学習した英語を意識的に使って指示を出したり質問をしたりするようにしている。

(2) 子どもと教師

英語は言葉であり、人と人をつなぐ大切なものであると考えている。そのため、授業者は日頃の授業より、生徒との言葉のやりとりを通して、良好な人間関係を築いていけるよう心がけている。本校の外国人教師は単独で授業を行っており、TT の形で英語の授業をなされることがないため、日本人教師のみの授業でも、外国との接点をつくるため、英語の新出文法を紹介する際には、生徒の興味を引きやすい外国のものなどを使うようにしている。たとえば、海外の友人から送ってもらった珍しいものや英語圏を中心に各国で注目されているニュースなどである。それらを使い、親しみやすい内容で授業を行うため、新しい英語との出会いの際に、難しいと感じる壁の高さを低くする努力をするようにしている。

また、10月には国際交流のある英国・ニューステッドウッド校の生徒たちが本校を訪れることが計画されており、実際の国際交流の場で対応できるようになるため、英語に即座に反応する QR (Quick Response:クイック・レスポンス) を意識した活動を行ったり、英語で授業を進める頻度を増やしたりしている。話す活動においては、ペア活動や学級全体でのインタビュー活動を行うことで、仲間との人間関係を築く試みをしている。さらに、新出文法を学習する際にペア活動やインタビュー活動で集めた情報をもとに英語を書かせる活動も行っている。それらには、身近なことや友達のことを英語で書くことで、親近感を持ちづらい英語を身近なものとして感じさせる意図がある。他人との関係を深めつつ、英語を身近に感じさせる活動に今後も取り組んでいきたいと考えている。

(3) 子どもと教材

学習が進むにつれて、生徒は自分が他人に伝えたいことを英語で話したり書いたりできることが増えてきた。2年生の終わりには、自分の夢について50語から100語程度のスピーチを書き、推敲を重ね、練習を繰り返し、クラス全体で発表をすることで、達成感と自信をつけてきている。また、3年生で学習する教材や新出文法には自己のことを表現したり伝えたりするために役に立つものが多いため、繰り返し使うことにより、自分の言葉として身に着けられることを期待している。

本題材での新出文法は、現在完了の完了用法、現在完了の経験用法、不定詞の感情の原因や理由を表す副詞的用法であり、自分のことについて書いたり、相手に伝えたりする時に使用頻度が高い文法項目である。また、現在完了の完了用法を使い、宿題の進捗状況の確認について話したり、最近話題のスイーツロールアイス(rolled ice cream)やタピオカドリンク(bubble tea)などをこれまでに試したことがあるかを現在完了の経験用法で話したり、4月の修学旅行での感想について不定詞を用いて話させることなども生徒が興味を持って活動しやすいと考える。そのような題材を使うことで、生徒が新出文法を習得しやすいように心がけた。

また、本題材では日本の芸能 (performing art)の一つとして落語が扱われている。本学年には落語に興味がある生徒がおり、その生徒が卒業研究への取り組みの一環で学年全体に落語についてプレゼンをしたこともあり、落語は身近な話題として扱いやすい利点もある。本題材では、落語家の大島希巳江さんが英語で落語を演じるときの困難さや楽しさを読むことで、日本や他の国の習慣や文化の違いに気づかせたいと考えている。そして文化や習慣の違いを受け入れることで、自分の人間関係の幅を広げ、今年度10月の国際交流でのイギリスの生徒たちとの積極的な関わりにつなげていきたいと考えている。

3 本題材での目標

- 現在完了の完了用法及び経験用法、不定詞の感情の原因や理由を表す副詞的用法の使い方を理解している。
(言語文化についての知識・理解)
- 現在完了の完了用法及び経験用法、不定詞の感情の原因や理由を表す副詞的用法を使って話されたり書かれたりした英語の意味が理解できる。
(外国語理解の能力)
- 現在完了の完了用法、経験用法、不定詞の感情の原因や理由を表す副詞的用法を使い、自分の伝えたいことを話したり書いたりすることができる。
(外国語表現の能力)
- 既習のチャンク（意味単位の英語のかたまり）を利用し、生徒自身のオリジナルの文や物語を書くことができる。
(外国語表現の能力)
- つなぎことばを使うことで、相手との会話をつなげ、積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- 日本の芸能の一つである落語に興味を持ち、英語で上演されている落語を聞き、内容を理解することができる。
(外国語理解の能力)

4 学習計画（全7時間）

- 第1時 現在完了の完了用法の肯定文・疑問文・否定文の理解と表現活動
- 第2時 現在完了の経験用法の肯定文・疑問文・否定文の理解と表現活動
- 第3時 **Get Part 1, Part 2** 内容理解
落語への興味、特徴について
- 第4時 不定詞の感情の原因や理由を表す副詞的用法を利用した表現活動
- 第5時 **Use Read** 内容理解①
大島希巳江さんが海外での落語公演を始めたきっかけについて
- 第6時 **Use Read** 内容理解②
落語を通じてわかった日本の文化や習慣の違いについて
- 第7時 英語落語の内容やおもしろさを理解する活動
「時そば」、桂三輝(Katsura Sunshine)による英語落語「せっけん噺（枕）、寿限無」
- 第8時 学習した英語を利用し、表現活動に生かすトレーニング（本時）

5 本時の学習

(1) 本時のねらい

- 与えられた英語を活用し、大まかに意味が通じる英文や物語を書くことができる。
(外国語表現の能力)
- つなぎことばを使い、相手との会話を途切れさせることなく成立しようとしている。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

(2) 期待される生徒の様相

「書くこと」の場面（チャンクを用いて英文を書く活動）

- A 与えられた英語を元に自分のアイデアを付け加え、新たな文を作ることができる。また、細かい文法にも注意しながら、伝えたいことを書くことができる。
- B 与えられた英語を活用して、自分の伝えたいことを英語にして書くことができる。
- C 与えられた英語を組み合わせて、新たな文を作ることができる。ペアの生徒英語に触れ、ペアの発想に共感することができる。

「コミュニケーションをとる」場面

(相手の書いた物語に質問をしたり、自分が書いた物語への質問に答えたりする活動)

- A 相手が書いた物語について、つなぎことばを適切に使い、会話が途切れているという印象を与えずに質問をしたり、自分が書いた物語への質問に答えたりしている。
- B 相手が書いた物語について、つなぎことばを使いながら、自分が書いた物語への質問に答えたりしている。
- C 相手が書いた物語について、詰まることがあっても質問をしたり、自分が書いた物語への質問に答えたりしている。

(3) 本時の展開

(○教師の意図 ◇全体への支援 ◆個への支援)

学習活動	教師の支援・意図
1. チャンク表で音声の確認をする (1) 全体で確認する (2) 各自で覚える (3) ペアで確認する	○リラックスした雰囲気です授業を始める。 ◇生徒が発音を間違えやすいものについては、繰り返し発音する。 ○チャンク表を覚えたかどうかペアで確認をする。 番号を言われたら日本語を見て素早く英語で言うようにする。 ◆英語を見ないで言うのが原則だが、わからない生徒には英語を見て読むよう指示する。
2. チャンク表を使ってのアウトプット活動① (1) 個人でエクспанション活動をする <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> チャンクに自分の知っている英語を付け加えて英文を書く </div> (2) 書いた英文をペアで交互に読みあう。 (3) 書いた文を全体で共有する。	○インプットしたチャンク表から選んだ英語を使い、大まかに意味が通る英文を作り、ワークシートに書く。 ◇教科書と同じ文にならないよう、オリジナルの文を作るようにする。また、限られた時間でできるだけたくさん書くよう指示をする。 ◆行き詰っている生徒には教科書と同じではないチャンクを組み合わせさせて書くよう机間指導で伝える。 ○ペアがどんな文を書いているかをお互いに確認をする。 ◇ペアでの活動がどう進んでいるかを机間指導をしながら確認する。 ◆相手の方を向き、英語を言うようにする。 ◇作った英文を、自信持って言える雰囲気づくりをする。

<p>3. チャンク表を使ってのアウトプット活動② 表より教師が選んだ3つのチャンクから連想する単語やフレーズを用いて物語を作る</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>与えられたチャンクを使い、自分のオリジナルの物語(スキット)を書く。</p> </div> <p>4. まとめ(イマジナリー・インタビュー活動)</p> <p>(1) 書かれた物語に対してペアが英語で質問し、それに答える</p> <p>(2) 全体で共有する。生徒がホワイトボードに書いたものに対して、当たった生徒が質問をし、物語を書いた生徒はそれに答える</p>	<p>○チャンク表の中の3つの英語を与え、それらを使って自分だけの物語を作る。</p> <p>◇与えられた時間で考えを膨らませて書くよう伝える。</p> <p>◆教科書などを見ずに書くのが原則だが、行き詰まっている生徒には、過去に学習した文や自分自身のことを振り返らせて、書くよう指示をする。</p> <p>○初見の英語で書かれた英文を読み、即興で質問をしたり、質問に対して答えたりする。</p> <p>◇書いた物語をペアに見せながら読むことで、物語の内容などに対して、質問をしやすくする。</p> <p>◆何を質問するかに迷い、言いよどんだりする際には、Filler を使い、会話が途切れた印象を与えないようにする。</p> <p>○全体で自分が作った文を提示する。</p> <p>◇ホワイトボードに書いて提示することで、全体にわかりやすく伝えるようにする。教師が読むことで、質問を考える時間を与える。</p> <p>◆当たった生徒が困っている場合には、Filler を使ったり、物語の一部に注目させたりして、質問をしやすくする。</p>
---	--

CHUNK for Today

Class : No : Name :

★チャング表を使つての学習目標★

- ① チャング表の英語と知っている英語をやりくりして、オリジナルの文を作る。
- ② チャング表の英語いくつかを利用して、新しい物語を作る。
- ③ チャング表の英語を使って作った新しい物語に対して、英語で質問をしたり、質問で質問をしたり、質問に答えたりする。

Lesson 3 Get Part 1

1	do you have
2	a minute
3	I've just finished
4	my homework
5	I have two tickets
6	for an English <i>rakugo</i> show
7	why don't you
8	come with me
9	I'd love to ~
10	I have been interested in ~
11	since last year

1	～がありますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	ちよつとした時間	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3	私はちよつど終えたところです	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4	私の宿題	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	私は2枚チケットを持っています	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	英語の落語講演の	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	～しませんか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	私と一緒に来る	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	喜んで～したいと思います	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	私は～に(ずっと)興味があります	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
11	去年から	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

Expansion Activity

アイデアをふくらませる活動

Class : No : Name :

- ① 表の中の英語のひとつのチャンクに自分のアイデアを足して、新しい英文を作ろう。教科書と同じ文はいけません。→ Creativity
- ② アイデアを足すのは前でも後ろでもかまいません。前と後ろ両方でもよいです。
- ③ 先生や友達に聞かず、自分が知っている英語で書くことに挑戦してみよう。
- ④ 作る文は、大まかに意味が通じるものにしよう。→ Approximation
- ⑤ 活動時間内にできるだけたくさんの文を書こう。→ Fluency

<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	B
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	A
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	
<input type="radio"/>	S
<input type="radio"/>	

(公開授業Ⅱ) 第1学年C組 英語科学習指導案

授業者 竹川 由紀子

1年C組教室

1 題材名 Project 1 (New Crown English Series 1)

2 教科・題材における「やりくり」

中学校学習指導要領の改訂により、英語の技能の一つである「話すこと」が「話すこと（発表）」と「話すこと（やり取り）」に細分化され、5つの領域でより具体的な目標設定がなされた。小学校での外国語活動や外国語の授業を経験し英語の素地を身に付けた生徒たちは、以前にも増して英語を使ったやりとりが即興でできるようになっているように思える。一方、中学校で本格的に文字を書いたり、単語を組み合わせる英文を書いたりする活動では、以前と同様に入門期の丁寧な指導が求められることも感じる。小学校の授業で英語に慣れ親しんできている生徒たちは、視覚、聴覚情報から感じ取ったことを英語でやりとりしようとする。中学校では、活用の場面をより焦点化して、知っている表現を使える場面の設定と実際に読んだり、書いたりする活動を繰り返すことで、インプットとアウトプットの積み上げを行っている。

この単元では、知っている語いで自分を紹介する英作文づくりの活動を行う。学習した知識をやりくりして「書くこと」を通して気持ちを伝える授業展開を行い、写真や直筆の文字などを示しながら英国の生徒たちを意識させた取り組みをしたい。本時は、自己紹介英文を元に今秋に交流するイギリス人生徒の書いた英文を読み、そして相手への質問を考えて自己紹介文を完成させる活動へと発展させていく。鳥取大学地域学部足立和美特命教授の指導をいただき、海外から届いた資料や直筆の文字を扱うことで、生徒が英語でのやりとりを現実のものとして、リアリティを感じさせながら授業が行えるようにした。直筆文字とその情報からイギリスの生徒の文字に対する意識や人気スポーツの相違など、さまざまな文化の背景についても読み取らせることができる。相手についての情報を読んだことを元に、生徒が相手の何に興味を示し、どんな質問を考えるのかは個々によってさまざまである。

本校の特色ある教育活動の一つとして、英国ケント州のニューステッドウッドスクールとの国際交流がある。2014年に両国の生徒同士が手紙のやりとりを始め、2015年には日本語を専攻する英国生徒が来日し、本校生徒と授業で交流した。その後も手紙やメールなど定期的なやりとりが続き、現在は隔年（2年に一度の）国際交流が定着した。今年度は、2年に一度の国際交流の開催年であり、生徒たちにとっては心待ちにしている行事が計画されている。

「正しい知識をできるだけたくさん効率的に学習すること」でなく、「正解のない問い、あるいは解が定まらない問いに最適な答えを考えて発信できる力」が、本時の活動を通して深まり、自分の書いた英語が「伝わった」と感じる内発的な動機づけが、今後の国際交流でも意欲的な生徒の姿勢を期待したい。

3 授業構成

(1) 教師と教材

中学校学習指導要領では、「コミュニケーションを図る 基礎となる資質・能力の育成」を目指し、3つの柱に沿った目標が提示されている。そのうち、(学びに向かう力・人間性等)に関する項目の目標が次のように示されている。

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

イギリスの生徒の直筆文字を通して、生徒は外国の文字文化に触れ、記載された情報を読み取ることによってスポーツや流行なども理解することができる。また、相手の背景を理解した上で相手との情報の送受信を行っていく。初歩的な表現を扱うが、外国の生徒が書いた文字を読んだり、その相手に対して自分のことを英文で書いたりすることで実際のやり取りを実感させ、今後の学習への意欲としたい。

(2) 子どもと教師

生徒たちは発音練習や音読を通して語彙を習得し、それらのインプットとアウトプットを繰り返すことを通して英語でコミュニケーションすることができるようになってきている。本来、コミュニケーションは「伝えたい」「話したい」という内発的な動機づけがあって、その必要感が生まれる。本時で扱う教材「自己紹介をしよう」では、習得した知識や表現を使って自己紹介文を書くという活動に、実際にイギリスの生徒へ伝えるという目的を示す(「見える化」する)ことで、生徒たちの「書きたい」「伝えたい」内発的動機を与えることとした。

英語を用いることで体感できる喜びや、英語でやりとりすることの意図にも触れながら、単なる言語の習得で終わらせない、学びの広がりや深まりに繋げていきたい。今後自分一人でも学習できるような生徒(Independent Learner)として育てたい。

(3) 子どもと教材

この単元では、知識として身に付けた語いを使って自己紹介文を書く教材である。生徒にとっては、英文を書いて文字で自分のことを伝える活動は本時が初めての題材となる。実際にはどのような場面が考えられるか、できるならば自分のことをあまり知らない相手に対して自分を伝えることを目的としたいと考え、相手として国際交流をするイギリス人生徒へ自己紹介する場面を設定した。

相手の情報からどんな人物なのかを想像し、その内容に関連した質問文を考えさせたい。自分の知っている語いをやりくりして伝えようとする。生徒の気持ちの中に「伝えたい」思いが生まれることを期待している。

4 単元目標

- 積極的に自己表現活動に取り組んでいる。 (コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- 自分のことについて伝える内容を整理しながら、工夫して自己紹介文を書くことができる。
(表現の能力)
- さまざまな国の言語や文化についての英文を読み、その国の人や文化について理解する。
(言語・文化への知識・理解)

5 学習計画 (全3時間)

第1時	一般動詞を使って自分の生活を英語で表現する	…1時間	
第2時	私の自己紹介 自己紹介の英文を書く	…1時間	
第3時	私の国際交流 イギリスの友達へ自己紹介文を書く	…1時間	(本時)

6 本時の学習について

(1) 本時の目標

- 英文の情報を読み、イギリスの生徒について理解する。 (言語・文化への知識・理解)
- やりとりの相手を意識した自己紹介文を書くことができる。 (表現の能力)

(2) 期待される生徒の様相

「読むこと」(イギリスの生徒の情報を読む)の場面

- A) イギリスの生徒が書いた情報を読み取り、その内容について正しく理解する。互いの文化の共通点や違いに気づき、日本と比較しながら内容を読み取ることができる。
- B) イギリスの生徒が書いた情報を読み取り、その内容について正しく理解する。互いの文化の共通点に気づき、自分と比較しながら内容を読み取ることができる。
- C) イギリスの生徒が書いた情報を読み取り、その内容について理解する。名前や誕生日などの基本的な情報を読み取ることができる。

「書くこと」(自己紹介文を書く)の場面

- A) 6文以上の英文で自己紹介の英文を書くことができる。一般動詞を適切に使い、つなぎ言葉や代名詞を使って紹介文を書くことができる。やりとりの相手に適した質問文を1文加えて書くことができる。
- B) 5文以上の英文で自己紹介の英文を書くことができる。一般動詞を適切に使い英文を書くことができる。やりとりの相手に適した質問文を1文加えて書くことができる。
- C) 3文から4文程度の英文で自己紹介の英文を書くことができる。一般動詞を適切に使い英文を書くことができる。やりとりの相手への質問文を1文加えて書くことができる。

(3) 本時における「やりくり」

- ・ 英語を学習し始めた1年生の生徒が自己紹介文を書く活動を通して、既習の語いでどのくらい英文を書くことができるか、インプットの蓄積を実際に活用(アウトプット)する場面を設定する。自分の知っている語いを使ってどのように伝えるのか、生徒のやりくりを期待したい。
- ・ また、実際に交流する相手の文字を読み、何を質問したいかを考えさせることで相手を意識したやりとりをめざしたい。

本時の展開

(○教師の意図 ◇全体への支援 ◆個への支援)













学習活動	教師の支援・意図 ※評価
1. あいさつ	◇ 表情やアイコンタクトを意識してあいさつし、学習の雰囲気づくりをする。
2. アウトプット活動① 一般動詞の確認・音読 一日の生活の音読 相手とのやりとり	◇ 1日の生活に関する一般動詞を音読確認する。連語・英文の音読・繰り返しなど順に段階をあげて定着を図る。 ◇ 読み手が、一日の生活を書いた英文を正しく音読するよう指示する。聞き手が、読み手の音読した内容を繰り返すことで英語のやりとりをするよう指示する。 ◆ 一度で聞き取れない場合に用いる Pardon? の用法を確認し、自然な発話の中で使用させる。
3. 発表とシェアリング① 生徒の自己紹介文を紹介し、共有する	○ 一般動詞の使い方や文と文のつながりを考えた英文の良さを紹介し、本時の活動でも意識にさせる。
4. やりとりの相手を理解する イギリスの生徒の情報を読む (個人→班) 写真・名前・年齢・兄弟、姉妹 好きなことなどの書かれた情報を読む	◇ イギリスの生徒の情報を紹介し、やりとりの相手を意識させて活動に取り組ませる。 ○ 個人での読み取りから班で情報を共有し合うことで思考を広げたい。 ※ 英文の情報を読み、イギリスの生徒について理解することができる。(言語・文化への知識・理解) ◆ 基本的な情報は上段に、具体的なことは下段に書かれていることを伝え理解のヒントとする。
5. アウトプット活動② <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">相手を意識した自己紹介文を書こう</div> ・相手を意識した質問文を加えた自己紹介英文を書く(班→個人) 目標は6文	◇ 読み取った情報を元に、相手を意識した質問を一つ加えて英文を書くように指示する。 ○ 班で様々な表現を確認し、自己紹介に加える最後の質問として何が適切かを考えさせる。 ※ やりとりの相手を意識した自己紹介文を書くことができる。(表現の能力) ◆ 班ごとに考えた質問を示すことで英文づくりのヒントとする。
6. 発表とシェアリング② 相手への質問文を加えた自己紹介文を紹介し全体で共有する。	◇ 生徒が自己紹介文を発表し、それについて評価し全体で良さや工夫を共有する。
7. 振り返り 本時の振り返りをする	○ 目標としていた英文で自己紹介が書けているか、相手を意識した質問が書けたかを確認し活動を評価する。

資料① 本時で扱うアウトプット活動 教科書 P 4 2

Words & Sounds ③

1日の生活

しんじ 真司の1日


★ 6:00  get up	6:10  wash my face	6:20  change clothes	6:30  eat breakfast
7:00  leave home	3:30  practice judo	5:30  come home	🌙 6:00  study
7:00  eat dinner	8:00  watch TV	9:00  take a bath	10:00  go to bed

資料② 本時で扱う主活動 教科書 P 4 6 自己紹介をしよう


Project ①

自己紹介をしよう

●クラスの友達に自分らしさが伝わる自己紹介をしよう。



1 **Read** 生徒会誌の「ALTの先生紹介」コーナーに、ブラウン先生の自己紹介が掲載されました。英文を読んでわかったことをメモしよう。



I am Lucy Brown.
I am from London. I like music. I play the guitar. I like karaoke too.
Do you like music?

(Lucy ルーシー(女性の名前) London ロンドン)

名前	出身地	
好きなこと	その他	

2 **Listen** ブラウン先生との初めての授業です。先生の自己紹介のあと、みんなが先生に質問します。

(1) 先生と生徒のやりとりを聞いて、話題になったことを [] から選んで () に書こう。

音楽 動物 スポーツ 食べ物 本

(2) もう一度聞いて、それぞれの話題についてわかったことをメモしよう。

	話題	わかったこと
①	(出身地) について	
②	() について	
③	() について	
④	() について	

(big 大きな city 都市 weekend 週末 cricket クリケット)

資料③ 自己紹介英作文ワークシート

Project 1 自己紹介をしよう Class ___ No. ___ Name _____

伝える相手を意識しながら、自己紹介の英文を書きましょう。英文は6文を目標にします。
 始まりのあいさつ *Hello. / Hi.*

1.	<i>I'm ... / I'm from ... / I'm thirteen.</i>
2.	<i>I like ...</i>
3.	<i>I have ...</i>
4.	<i>I play ...</i>
5.	<i>I sometimes cook onigiri for my family.</i>
6.	

1.	私は〇〇です / 〇〇出身です / 〇歳です
2.	私は〇〇が好きです～
3.	私は ... を持っています / ... がいます ... を飼っています
4.	私が... をします / ... を演奏します
5.	私はときどき家族のために「おにぎり」を作ります～
6.	

終わりのあいさつ *Thank you. / Nice to meet you.* など

あいさつ

..... _____

内容

<i>I am</i>
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

あいさつ

..... _____
